

令和7年 お茶づくり技術情報 (No.9)

2025年8月4日
佐賀県茶業技術協会
佐賀県茶業試験場

1. 気象

1) 気象の経過

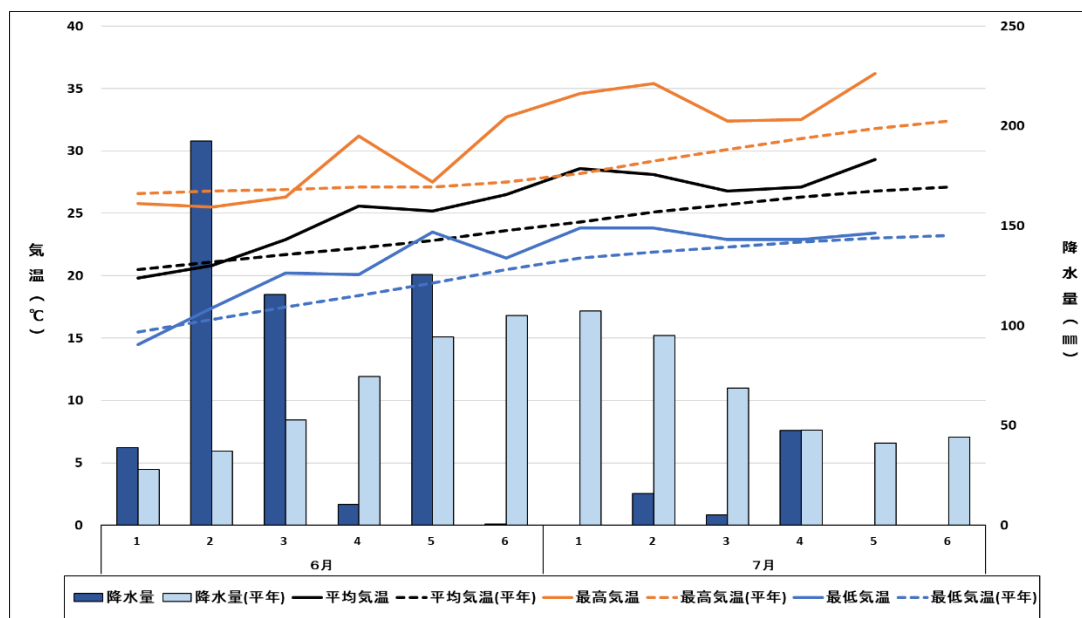


図1 2025年6月～7月における半旬別の気温および降水量

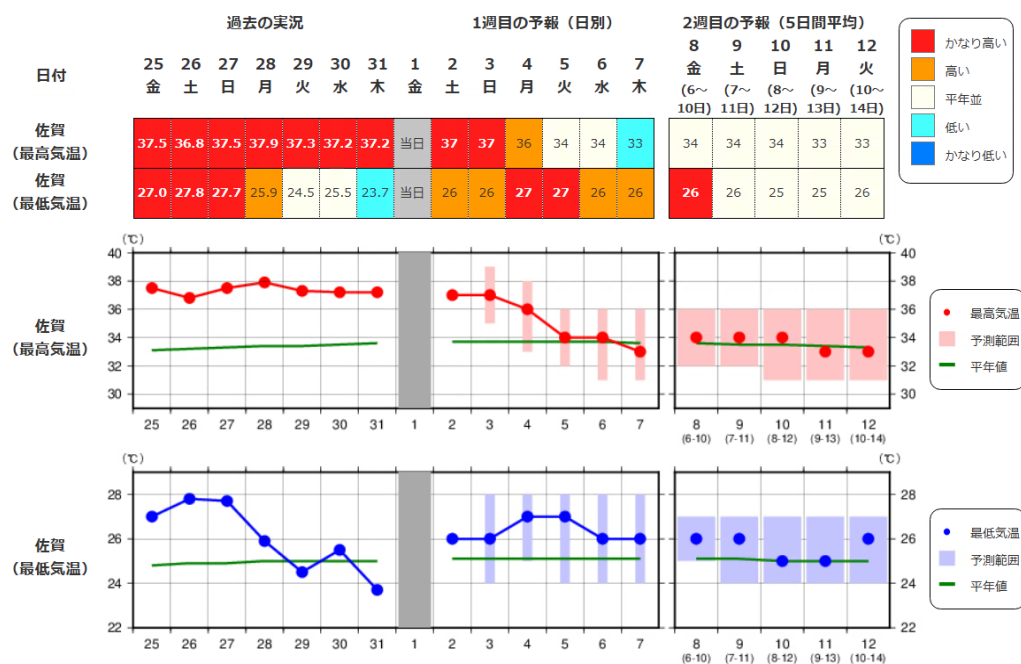
注) 平年値は1991年～2020年の平均値を表す。

(1) 半旬別気温は、ほとんどの期間で平年よりも高く、特に6月第6半旬から7月第2半旬は平年よりかなり高く推移した。

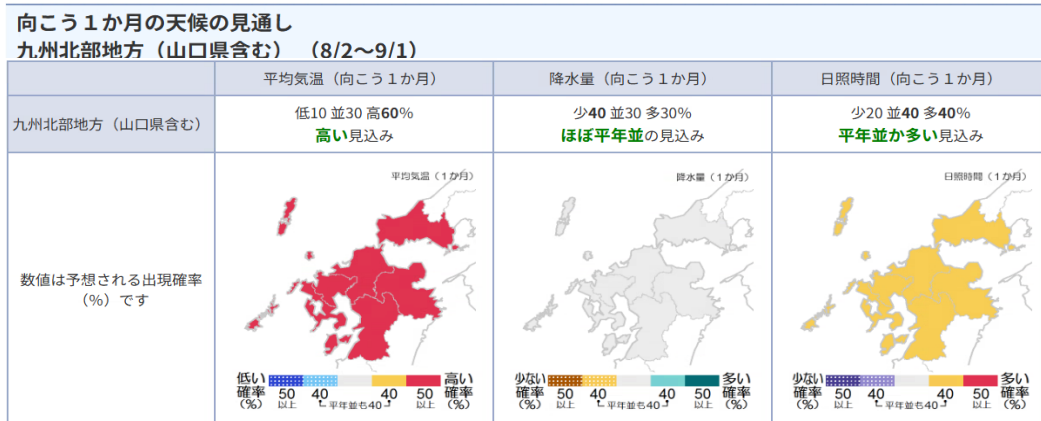
(2) 7月の降水量は合計68.5 mmであり、平年値382.7 mmの約18%であった。

2) 今後の気象の見通し

■2週間予報 (気象庁、2025年8月1日更新)



■ 1か月予報（気象庁、令和7年7月31日発表）



- （1）向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高い状態が続く見込み。
- （2）天候については、平年に比べ晴れの日が多くなる見込み。

2. 今後の管理

1) 土壌・肥料

■ 土壌 EC 値の動き

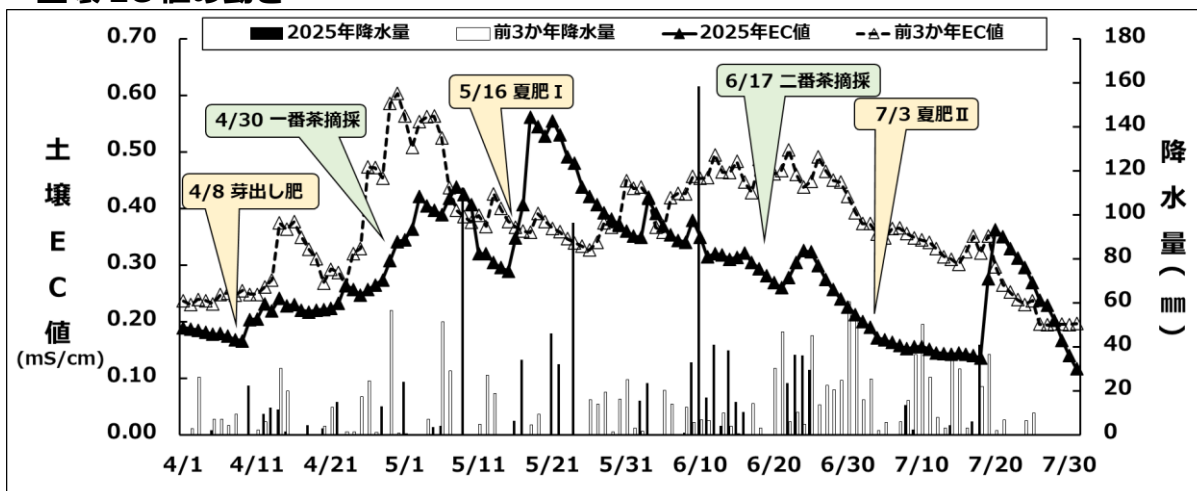


図2 茶試作況調査園における土壌 EC 値の推移

注1) 本年の土壌 EC 値は、雨落ち部の深さ25cm部分に埋設した土壌センサーにて測定し、実測値に基づき推定した値を示す。

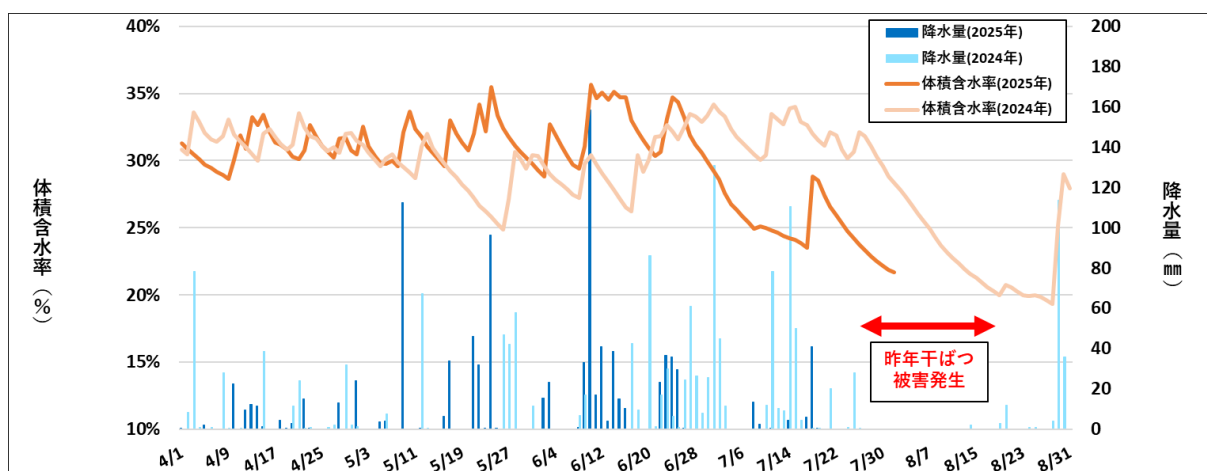


図3 茶試作況調査園における土壌中体積含水率の推移

- (1) 土壌 EC 値について、7 月 3 日に 2 回目の夏肥を施用した後、7 月 18 日の降雨によって急激に上昇した。しかし、その後降雨がなく減少を続けている。
- (2) 土壌中の体積含水率について、7 月 31 日時点で 12 日間降雨がない状況が続いており、前年の干ばつ被害が発生した期間と同等の水準に近づいているため、早急に対策する必要がある。

■酸度矯正

茶樹の生育に適した土壌 pH は 4.0～5.0 であるが、県内茶園の中には pH4.0 を下回る茶園が多く見られる。そのため、苦土石灰等のアルカリ資材の投入・混和による酸度矯正が必要である。また、苦土石灰は苦土の補給も兼ねることができ有効である。

(1) 施用時期

7 月下旬～8 月中旬（秋肥施用 2 週間前）

(2) 投入量

目安として 100kg/10a（苦土石灰の場合）

土壌や用いるアルカリ材の種類によって投入量が異なるため、土壌診断結果に基づき決定する。

(3) 注意点

石灰資材とアンモニア態窒素を含む窒素肥料を十分な間隔を空けずに施用すると、アンモニアがガス化、揮散することがある。窒素成分が無駄になるだけでなく根を痛めることがあるため、アルカリ資材投入後、窒素肥料の施用は 2 週間以上間隔をあける。

2) 高温干ばつ対策

昨年は、夏季の高温干ばつにより葉焼け被害が散見された。本年はさらに早い梅雨明け直後から高温干ばつ始まり、今後も続く予報が出ている。この時期は来年一番茶の母枝となる芽の生育期であり、この時期に干ばつの影響を受けると、翌年一番茶の減収につながるため対策が必要である。幼木園では土壌表面からの蒸発が大きいいため、特に注意する必要がある。

- (1) 葉の艶や色、萎れの観察を行い、畦間の土壌水分が不足していないか確認する。
- (2) 整枝は強いほど根が枯死するため、干ばつ時は茶樹への負担が大きく、吸水能力が低下するため整枝を控える。
- (3) 土壌からの水分の蒸散と地温上昇を抑えるため、裾刈りは控える。
- (4) 敷きわらや敷き草でマルチングし、蒸発および地温上昇防止に努める。
- (5) 幼木園や一・二番茶摘採後に更新を行った園、土壌が乾きやすい園では、通常より早めに灌水を開始する。幼木園では特に、土壌灌注を行うと効果が高い。

- (6) 灌水は 5mm 以上の雨が降らない期間が 10～15 日続いた場合、4t/10a 以上を目安に行う。スプリンクラー灌水ができる場合は、7 日おきに 20 t /10 a を夕方の涼しい時間帯に行う。農業用水を十分に確保できない場合は、根に水分が確実に届くように、株元灌水を行う（厳しい干ばつ時は畝間の細根が枯死している）。
- (7) 遮光率 50～60 %程度の黒寒冷紗で被覆する（直接被覆は葉焼けを起こす場合があるので注意する）。
- (8) 深耕を行うと、根の切断や、地下部の乾燥により、生育停滞が生じる恐れがある。そのため、十分な降雨があるまでは実施を控え、状況によっては次年度に計画する。

3) 深耕

管理作業時の踏圧によって土壌がしまり、通気性や排水性が悪化する。土壌硬度計の数値が 22 を超えると根の伸長が著しく悪くなるため、深耕による土壌物理性の改善が重要である。

特に来年度中切り更新を計画している園や幼木園では、効果がより高くさらに、深耕前に堆肥等の有機物を施用することで土壌環境の改善が期待される。

(1) 実施時期

8月中旬～9月上旬（山間部は早め（～8月下旬）に行う）

(2) 注意点

時期が遅れると発根を抑制するため、新根の発生が始まる前に行う。

4) 台風対策

台風が襲来した場合、大雨による水害、強風による茶樹の物理的損傷や潮風害を受ける可能性があるため注意が必要である。強風によって葉傷が生じた場合、傷口から赤焼病等の病原菌が侵入するため、これまで発生歴のある園では特に注意を要する。

(1) 事前対策

- ・大雨による土壌流亡を防ぐため、園内外を巡回し集排水溝を点検、整備する。
- ・防風ネットを設置する。
- ・特に沿岸地帯の茶園では、潮風害対応のため事前に散水用の真水を確保しておく。

(2) 事後対策

- ・強風で葉傷が生じた園では、できるだけ早く銅水和剤の散布を行う。また赤焼病等の発生歴のある園ではカスミンボルドーの散布を行う。
- ・幼木園では、マルチのはがれや株の浮き上がりを点検し、元の状態に戻す。
株が動いた場合は、早めに土寄せを行い、敷きわら等で地際部や根を保護する。
- ・先枯れ、枝枯れ等、被害が大きい場合は樹の回復後に被害部の直下でせん除する。
- ・被害園では樹勢の回復を最優先とし、整枝や施肥は控える。
- ・潮風害の発生が懸念される茶園、特に海岸線に近い茶園では台風通過後速やかに真水を散水し、付着した塩分を洗い流す。
- ・強風害・潮風害に伴い、落葉等の被害園では、樹勢回復のために窒素肥料の葉面散布が効果的である(ただし、最終摘採園のみ)。